



赤羽別院報 第20号
 発行所 大谷源 赤羽別院 報室寺
 発行人 浅野 伶
 愛知県幡豆郡一色町赤羽上郷中14
 Tel・Fax (0563) 72-2308

死から目を背けている人は 見そこなうかもしれません

今日、死を直視しないあり方がいたるところで蔓延している。青木氏の『納棺夫日記』には、映画『おくりびと』に抜けて落ちている死の実相を鋭く捉えている。



私が納棺のお手伝いを始めた頃、自宅に亡くなられた方の体をきれいに拭いて、棺の中に入れてという湯灌や納棺は、すべて親族の手によって行われていました。当時、富山県・北陸の方では凡そ五〇%以上が自宅死でした。さらに昭和二〇年から昭和三〇年頃では、九〇%以上が自宅死でした。都会では、病院は焼け野原になって入院するところはなく、ほとんどが自宅死だったのです。ところが、現在はほとんど病院か施設での死亡です。

親族の恥といわれて
 私が葬祭に勤め始めて間もない頃、突如、私の前に叔父が現われ「聞くところによれば、死体を拭いて歩いていられない。すぐやめろ。狭い田舎でそんなことやられたら、親族は街も歩けやしない。お前は親族の恥だ」と言っていて見舞で帰っていききました。ある日、その叔父が末期癌で入院していることを聞いた瞬間「さあまみろ」と思いました。自分のこと人間すこいですね。自分のこと

しか考えていない。最後に「親族の恥だ」と言われたことしか覚えていなかったのです。叔父が意識不明なら見舞いに行つてやろうと思つて出かけました。病室に入り、叔父のそばに座つた瞬間、叔父が震えるように手を出してきたから仕方なく握りました。握つたら、叔父がポロポロと涙を流すのです。その顔は、とつても柔和で優しい、仏さんみたいな顔をしていました。

私の耳に微かに「ありがとう」と聞こえてきた。聞こえてきた瞬間、私は涙が噴き出すように出てきて、「叔父さん許してください。僕が悪かったです」という気持ちになつて、そこに土下座をして手を握っていました。叔父が家へ帰つて暫くしたら、叔母から「あなたが帰つた後、間もなくして亡くなったわ」と電話がありました。

その日の夕暮れ、アパートの駐車場に車を置きながら、私は不思議な光景を見ていました。世の中がとてつもないのです。スーパーへ来る買物客が輝いて見える。走りまわると子供たちが輝いて見える。犬が、垂れはじめた稲穂が、雑草が、電柱が、小石までが光つて輝いて見えるのです。部屋へ戻つてみたら妻もまた、手をあわせたいほどに輝いて見えました。私達には、ダイヤモンドは光つて見えない、砂利とか小石は光つて見えますよ。それが水晶のように輝いている。井村さんの「歩けるところまで歩いていこう」という言葉は、死を受け入れた言葉です。私は、生るときはハツと思つたので、死が限りなく近づいたとき、あ

百死を受け入れたとき
 痛により、三十二歳の生涯を終えられた井村和清さんという方が、全身に癌細胞が転移したことを知つた日の晩に綴つた日記がございます。日記のなかで、私が涙で読めなくなった文章を紹介いたします。痛が肺に転移したときに覚悟はしていた(中略)レントゲン室を出るとき、私は決心していました。歩けるところまで歩いていこう。

映画『おくりびと』が
カットしたものが
 社会から白い目で見られてきた私は、大変なコンプレックスを持っていました。しかしそれは、死の実相を知らない人達が作り上げた、誤つた死に対する価値観に私自身が縛られていただけにすぎなかったという事。そう思うと亡くなられた方のお顔をきちんと見て、納棺の務めを果たすようになりました。そんなとき、「人は死んだら何処へいくのだろう」と思うようになります。人間は、明日が不安なら、今も不安なものです。未来



岡崎教区公開講演会講話より

講師プロフィール
青木 新門 (あおき しんもん)
 一九三七(昭和十二)年生まれ
 早稲田大学中退後、富山市で飲食店経営の傍ら文学を専修
 一九七三年 冠婚葬祭会社に入社し専務取締役を経て現在非常勤監査役
 一九九三年 現場の体験「納棺夫日記」を著しベストセラーになる
 二〇〇八年 納棺夫日記を原作とした映画『おくりびと』がアカデミー賞を受賞
 現在は主に著述や講演活動
 主な著書
 小説『柿の炎』詩集『雲道』
 手帳旅行記『誕生回廊』など

いのちのバトンタッチ
 私が葬式の現場や納棺の現場で詠んだ「いのちのバトンタッチ」という詩を紹介します。人は必ず死ぬのだからいのちのバトンタッチがあるのです。死に臨んで先に往く人が「ありがとう」と云えば「ありがとう」と応える。そんなバトンタッチがあるのです。死から目をそむけている人は見そこなうかもしれませんが目と目で交わす一瞬のいのちのバトンタッチがあるのです。「ありがとう」と言えなくても目と目で「ありがとう」と言っている一瞬のバトンタッチ。昔、村でしたら、人が亡くなる前から村中の人が集まって来た。死の瞬間、生まれる時もそうでした。しかし、そのつながりが完全に絶たれている。今日では後生の大仕事という瞬間が、社会から失われてきております。私が『納棺夫日記』で最もこだわつた一点です。五月十七日



| | |
|--------------------------------|--|
| 報恩講 ほうおんこう | 10月14日(水) 初速夜 午後1時 法話 第13組 長壽寺 和田純信師 |
| 除夜の鐘(初鐘) | 10月15日(木) 日中 午前10時 速夜 午後1時 結願展覧 午前10時 結願日中 午後1時 法話 第11組 本澄寺 榎野明仁師 15・16日はお斎の用意をしております。お誘合せのうえお祈り下さい。 |
| 修正会 しゆしやうえ | 12月31日(木) 午後11時45分より 先着順にどなたでも鐘撞できます。 |
| 農朝法話 しんじやうほうわ (午前7時) | 1月1日(金) 午前7時 法話 第14組 尊興寺 赤羽別院 輪番 浅野 伶師 |
| | 10月13日(火) 第13組 本浄寺 津田賢順師 10月14日(水) 第13組 明栄寺 小谷宣示師 11月13日(金) 第14組 蓮成寺 青木 馨師 28日(土) 第14組 光寿寺 加藤要子師 12月13日(日) 第8組 順覚寺 山田智永師 28日(月) 第8組 安楽寺 伊奈祐禪師 |

赤羽地域 教化センター 一年間の活動と次なる目標

寺族も門徒も二年に一度は赤羽別院へ
 赤羽地域教化センターは、昨年、儀式部・伝道部・暮らし部・広報部の四部組織で活動を開始し、教化事業に取り組んでまいりました。

赤羽別院が真宗門徒の心の拠りどころとして、また、間法の道場としてあり続けるために、教化活動を一層充実したものとすべくあります。この一年をふり振り返り、各部の次なる目標とこれに対する問題点等について特集しました。

一年の歩みとこれから

1. 当初の計画

各寺・各組では取組みが難しい事業に絞り、先ず、住職・寺族・役員の研究を中心実施していきこうと、従来の別院教化事業を見直し、伝道部会に何を望まれ、何ができると考えて進める予定でスタートしました。

ところが、実際には長年親しまれてきた事業の実施時期が迫り、その準備に追われながら、試行錯誤で取組んできたのが実状です。

2. 一年間の実績
 当初二名で発足した伝道部会は、現在は各組一名計七名で構成され、この一年間に、住職・寺族研修会(葬儀について)、



帰敬式の様子

現在女性スタッフが一名であり、女性ならではの視点があるため、女性中心に企画する事業が必要とされており、これは次年度の課題です。継続を第一に、これまで実施した事業の反省点を踏まえて、現在取組んでいる事業を推進していきます。また、皆さんの声を積極的に取り入れ、より大勢の方々に呼びかけ、ご理解とご協力を得ながら、魅力ある事業となるように考えて参ります。



池田師を囲む座談会

生老病死は暮らしの中

赤羽地域教化センター発足に伴い、暮らし部が新設されました。儀式部・伝道部がセンターからの発信部門とすれば、この部は受信が仕事です。日々の暮らしの中で起きるさまざまな問題、子育て・職場・看病・介護・葬儀などなど。私たちは知っていないので、現場の生の声を知らないのでは無いでしょうか。だから、その生の声を聞く場を開くのが暮らし部の仕事だと思います。現場の声を聞き、感じたまを語り合えば自分の世界が広がります。第一回は、子供の素顔を養護の先生に話していただく、公開学習会をおしやべりを開きました。その次は現地見学も企画しています。年配の方が元気を取り戻す回想法を学びに行きます。

教化に直結する 法要儀式をめざす

別院や寺での法要が、多くの人に宗教的な感動を与える場になることこそ重要と考えました。仮に、感動が乏しい現状があるとするならば、技術的問題なのか、儀式への関わり方の問題なのか、あるいは儀式の内容そのものの問題なのかを吟味しながら、教化につながる法要儀式を検討していくことになりました。



夏の御文・作法講習

「一年に一度は別院にお参り」をすべての住職・門徒に呼びかけ参詣を促し、満足していただける法要にしていきたいと思います。その後、徐々に地域として取り組む内容にシフトしていく予定です。門徒宅の法事の動行式を根本から問い直す作業、寺の報恩講や別院の法要を点検する作業から着手しました。秋の報恩講と春の報恩講を中心、寺の活性化につながる同時生に寺例からの積極的な関わりが生じるように検討してきました。そして住職や坊主をはじめ、門徒会や地域総代の皆さんの

参加を、組織的なものにしていきたいと思えます。それは各寺でも当てはまることです。



公開学習会

蓮如さんはしきりに寄り合いの談合を勧められました。「物いわぬ者はおそろしき、また、人にもお底もきこえ、また、人にもおさるるなり」と。暮らし部の企画によって、そこに寄り合った人たちが、率直に語り合っことが出来たらしいですね。気楽にご参加下さい。

課題を共有して 意見を交わす場を開く

1. 目指しているもの
 広報の役割は、地域教化センターと組む寺の動きを取材し、皆が課題を共有できるような情報を発信することである。葬儀など寺々が抱えている問題を地域で協働して取り組んでいくために、意見交流を生み出す場を開きたい。

2. 発足から今まで
 これまでに「赤羽御坊」紙4回と「赤羽別院リーフレット」を発行し、「葬儀リーフレット」「瓦ものがたり」の編集を行った。

「赤羽御坊」については、各部独自の活動がまだ始動していなかったため、センターの機関紙としての役割を充分果たせていない。紙面は法話を一面に配し、地域の歴史や門徒の意見などの記事も構成した。また今年度には、組や寺と動き始めた各部の姿を掲載した。問題点を掘り下げて取材していくこととすると、紙面不足になってしまうことが悩みである。

「赤羽別院リーフレット」は7月発行「葬儀リーフレット」は文案を作成し終わり、今後他部会と協議しながら手直しをして、会葬者に配布したい。

「瓦ものがたり」は、志貴野の製瓦場について古老からの伝聞を中心に、地元ならではのものを作ろうと鋭意編集中である。

3. ホームページの新たな取り組み
 これを御坊紙や二つのリーフレットを補完するものにした。インターネットは速報性に優れ、双方向で意見の交流もできる。その点を活かしてみたいと考えている。



Yes! 高須クリニック
 美容外科・形成外科・美容皮膚科・泌尿器科・歯科
 院長 高須克弥

●年中無休 ●予約制

電話受付 0120-5587-15
 9:30~22:00

歯科専用 0120-4180-86
 10:00~19:00

赤坂 地下鉄千代田線 赤坂駅5番A出口すぐ
 〒107-0052 東京都港区赤坂2-14-27
 国際新赤坂ビル東館12F
 TEL.03-3587-2061
 歯科直通 03-3583-9244

まごころ込めておつくりします

総本家五代目 仏壇礼二郎 店

仏壇仏具 製造販売 洗い修理

千代田一〇四七
 愛知県豊田県豊田大字赤羽別院前
 電話(0565)371857番

「ボ」ちゃん HOUSEN



煌々・お寺あちこち

かつては、地域のお寺で目にするのができた結婚式の光景。今日では私達の記憶から消え去ろうとしているが、過日、幡豆町の祐正寺において仏前結婚式を挙げる若者二人の姿があった。ご近所の方々が大勢かけつけ、二人の前途を祝う貴重な光景がそこにあった。

6月20日、祐正寺のご本尊の前で輝かしい人生をスタートさせた。

新郎 加藤 靖幸様
新婦 加藤 薫様

Q 仏前結婚式を挙げられた動機は?
A 仏壇が身近にあるため教会や神社よりお寺に親近感があり、ご先祖あつての自分という気持ちからです。
(新婦) 私も子供の頃、報恩講等の行事に参加していた事もあり同感です。

Q 挙式後の感想は?
A 仏前結婚式ができてとても嬉しいです。家族や親

族は「こんな良い場所があったんだ」と喜んでくれ、来賓の方々も心より祝福して下さったことに、感謝の気持ちでいっぱいです。

Q これからはどのような人生を?
A ご先祖さんや色々な方との繋がりを、そしてご縁があり私達二人が出合っことできました。このご縁を大切に、家族やご住職を含め周囲の方々への感謝の念を忘れずに、これからの人生を大事に生きていきたいと考えています。

末永くお幸せに
(本多・藤原記)



結婚式の様子

赤羽別院崇敬区域内では、数多くのお寺で多彩な行事が展開されている。寺と門徒の絆の稀薄化がささやかれる今日、久しく「お寺の人だかり」を目にする機会がなかったが、近頃、子供の頃の記憶にある「賑やかなお寺」の光景に接することができた。

心に残る「お寺の出来ごと」を紹介したい。

生活の中の寺院 佛前結婚式

第9組 祐正寺

なぜ門徒は寺に参らなくなったのか、「仏教は難しいし、解らない。寺は敷居が高いし、陰気臭い」等の理由である。それを解消し「仏教に親しんでもらうこと」を目的とした法話の会が開催された。

第五回法話に親しむ会が過六月七日専興寺において開かれた。タレントで、今は講師役としても活躍中の水谷三三郎を迎え、百八十余名ご満堂の聴聞者があった。「地獄と極楽」という重いテーマであったが、三三郎さんの明るいキヤクターと素晴らしい話術的の得た響き話のおかげで、肩も凝らず気軽に聞くことができた。一時

満堂の盛りあがり 法話に親しむ会

第14組 専興寺

なぜ門徒は寺に参らなくなったのか、「仏教は難しいし、解らない。寺は敷居が高いし、陰気臭い」等の理由である。それを解消し「仏教に親しんでもらうこと」を目的とした法話の会が開催された。

その笑いは煩悩具足の私たちの真実をついた笑いであり、現実の恐ろしさを指摘したほろ苦い笑いでもあった。随所に仏教用語を使い、その解説も丁寧に行われた。私達の身のまわりにも多くの仏教用語が使われていることに改めて認識し、それらの言葉の大切さを知るよい縁でもあった。

(浅野記)



高座で熱演

色町大塚の明栄寺では、去る5月30日お寺と地域の長寿会や子供会が力を合わせ「大塚の蓮如さん&花まつり」が開催された。お年寄りからお孫さんまで、家族揃って過すほほえましい光景があちこちで見受けられた。

明栄寺付近に車を進めていると、あちこちの小径から、子供仲間・赤ちゃんを抱っこする若い夫婦や孫の手を引くお婆ちゃんが足早にお寺に向う姿に出合った。

大家の蓮如さん&花まつり

老若男女揃って

第13組 明栄寺

お寺には既に大勢の人々が集まり、境内では綿菓子作りコーナーや各種売店に人が群がり、金魚すくいや自分で折った紙ヒコーキ飛ばし競争に子供たちの声が弾んだ。



夢中・金魚すくい

本堂では、勤行と蓮如上人絵伝の絵解きやフルト他の演奏会、庫裡で書画他の展示会があった。老夫婦がお釈迦さまに甘茶をかけたお供えを「嬉しいねえ。来年もやっておくれんかねえ」その笑顔が実に印象的だった。

(石川記)

赤羽御坊 新聞ご懇志 (順不同・敬称略) 第10組

| | | | | | | | | | |
|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 朝岡 良夫 | 朝岡 良夫 | 朝岡 良夫 | 朝岡 良夫 | 朝岡 良夫 | 朝岡 良夫 | 朝岡 良夫 | 朝岡 良夫 | 朝岡 良夫 | 朝岡 良夫 |
| 石川 直人 | 石川 直人 | 石川 直人 | 石川 直人 | 石川 直人 | 石川 直人 | 石川 直人 | 石川 直人 | 石川 直人 | 石川 直人 |
| 稲垣 浩一 | 稲垣 浩一 | 稲垣 浩一 | 稲垣 浩一 | 稲垣 浩一 | 稲垣 浩一 | 稲垣 浩一 | 稲垣 浩一 | 稲垣 浩一 | 稲垣 浩一 |
| 稲垣 浩一 | 稲垣 浩一 | 稲垣 浩一 | 稲垣 浩一 | 稲垣 浩一 | 稲垣 浩一 | 稲垣 浩一 | 稲垣 浩一 | 稲垣 浩一 | 稲垣 浩一 |
| 石原 政夫 | 石原 政夫 | 石原 政夫 | 石原 政夫 | 石原 政夫 | 石原 政夫 | 石原 政夫 | 石原 政夫 | 石原 政夫 | 石原 政夫 |
| 岡田 俊二 | 岡田 俊二 | 岡田 俊二 | 岡田 俊二 | 岡田 俊二 | 岡田 俊二 | 岡田 俊二 | 岡田 俊二 | 岡田 俊二 | 岡田 俊二 |
| 杉浦 和江 | 杉浦 和江 | 杉浦 和江 | 杉浦 和江 | 杉浦 和江 | 杉浦 和江 | 杉浦 和江 | 杉浦 和江 | 杉浦 和江 | 杉浦 和江 |
| 鈴木 純一 | 鈴木 純一 | 鈴木 純一 | 鈴木 純一 | 鈴木 純一 | 鈴木 純一 | 鈴木 純一 | 鈴木 純一 | 鈴木 純一 | 鈴木 純一 |
| 鈴木 純一 | 鈴木 純一 | 鈴木 純一 | 鈴木 純一 | 鈴木 純一 | 鈴木 純一 | 鈴木 純一 | 鈴木 純一 | 鈴木 純一 | 鈴木 純一 |
| 鈴木 純一 | 鈴木 純一 | 鈴木 純一 | 鈴木 純一 | 鈴木 純一 | 鈴木 純一 | 鈴木 純一 | 鈴木 純一 | 鈴木 純一 | 鈴木 純一 |

朝岡 良夫 朝岡 良夫 朝岡 良夫 朝岡 良夫 朝岡 良夫 朝岡 良夫 朝岡 良夫 朝岡 良夫 朝岡 良夫 朝岡 良夫

石川 直人 石川 直人 石川 直人 石川 直人 石川 直人 石川 直人 石川 直人 石川 直人 石川 直人 石川 直人

稲垣 浩一 稲垣 浩一 稲垣 浩一 稲垣 浩一 稲垣 浩一 稲垣 浩一 稲垣 浩一 稲垣 浩一 稲垣 浩一 稲垣 浩一

石原 政夫 石原 政夫 石原 政夫 石原 政夫 石原 政夫 石原 政夫 石原 政夫 石原 政夫 石原 政夫 石原 政夫

岡田 俊二 岡田 俊二 岡田 俊二 岡田 俊二 岡田 俊二 岡田 俊二 岡田 俊二 岡田 俊二 岡田 俊二 岡田 俊二

杉浦 和江 杉浦 和江 杉浦 和江 杉浦 和江 杉浦 和江 杉浦 和江 杉浦 和江 杉浦 和江 杉浦 和江 杉浦 和江

鈴木 純一 鈴木 純一 鈴木 純一 鈴木 純一 鈴木 純一 鈴木 純一 鈴木 純一 鈴木 純一 鈴木 純一 鈴木 純一

鈴木 純一 鈴木 純一 鈴木 純一 鈴木 純一 鈴木 純一 鈴木 純一 鈴木 純一 鈴木 純一 鈴木 純一 鈴木 純一

鈴木 純一 鈴木 純一 鈴木 純一 鈴木 純一 鈴木 純一 鈴木 純一 鈴木 純一 鈴木 純一 鈴木 純一 鈴木 純一

貴重なご懇志をありがとうございます

子ども絵画展 第2回

第2回赤羽御坊子ども絵画展が開催され、幼児の部と子供の部を合わせて総数一〇〇点もの多数のご応募をいただきました。

この中から優秀作品として、金賞10点・銀賞20点・銅賞30点を堂内に展示し、8月24日に代表して金賞受賞者を招き、賞状に記念品を添えて称えました。

時代の移り変わりとともに、境内で遊ぶ子供たちを見ることが少なくなった今日「絵を通してお寺を身近に感じてもらうこと」が私たちの願いであります。(石川祐記)

金賞受賞者 (順不同)

- 山田彩空さん
- 山田悠仁くん
- 三浦ほのかさん
- 水越 萌さん
- 村松 駿くん
- 水野巴朱希さん
- 石原未菜さん
- 鈴木美智子さん
- 山下樹里さん
- 服部雅也くん

東本願寺御用達

日下念珠店

〒600-8174 京都市下京区烏丸通花屋町下ル
TEL(075)351-6325 FAX(0120)89-5255
定休日 日曜日

御本山 御用達

営業品目 法衣・打敷・御幕・念珠・貸種児衣裳
御本山へ参拝、納骨の際には是非お立ち寄りください。

(株) 平安法衣店

〒600-8153
京都市下京区東本願寺大門前
TEL(075)351-3681(代)
FAX(075)351-5563

～京に生まれ育って180年～

経済産業大臣指定 伝統的工芸品

京仏壇・京仏具

若林

www.wakabayashi.co.jp

京都本社/京都市下京区七条通新町東入
☎(075)371-3131 朝 600-8218
フリーダイヤル ☎0120-37-8585(昼間)
東京店・築地店・札幌店・仙台店
近江草津店・福岡(宮)・新潟(宮)
E-mail info@wakabayashi.co.jp

Support 750

行こまい報恩講

ほうおんこうつてなに?

もしも子どもに「報恩講ってなに」と聞かれたら、どう答えますか。

ある真宗の盛んな地方でアンケートをとったら「先祖の恩に感謝する法要である」という答えが多かったそうです。恩に報いると読んでいるのですね。本当の意味はそうではありません。報恩講とは、親鸞聖人のご命日を機に、聖人のご苦労を偲び、如来の本願を聞き開く真宗門徒にとって一番大切な法要です。

聖人は、一二六二年十一月二十八日にお浄土へ還られたので、今年は七四七年目の報恩講を勤めることとなります。こんなに長い間、毎年本山や末寺、御門徒の家々のお内仏において、お華束をつくり、仏華を立て

門徒の声

報恩講にお参りして自分自身を見いぬよう

毎年、報恩講にお参りします。本堂の内に座っていると、読経の響きが私の全身を包み、体の芯まで沁みわたる。御香を静かに吸い込むと何か心安らかに。これまでの雑念がスーと消えて、無心の境地になる。

經典の難しいことはよく解りません。聴きながらただじっと目を閉じています。其処に自分自身をおいておくことが、私は好きです。しばらくは何も考えずに正座してきます。落ち着いた気持ちになります。

お勤めをしてきました。聖人の教えに出会い、自らの姿に目覚めて、ひとと通じ合う世界が開かれた喜びと謝念があったからこそ、何百年を経た私達のところまで伝えられて来ました。

報恩講は、真宗が現在にまで相続してきた根本の生命を表しているのです。先達の真摯な姿を想いおこし、いま一度心新たに、今年の報恩講を厳肅にお勤めしたいと思えます。

(古部記)



報恩講の勤行

そして、お鈴の音で現実に戻されます。ここに来るまで考えて、どうしようか迷っていたことをあれこれと思い浮かべます。自分の体のこと、家族のことなどその時々により様々です。その解決方法を考えます。

仏様を見上げて、解決方法を仏様と相談します。仏様に教えていただいて決めます。

私は、その方法で最大限努力することを仏様に誓います。仏様も私の精進を見守るように、笑みをたたえて下さいます。

私は、意を決し、満足して意気揚々と本堂を後にします。

そして思います。「来年の報恩講にも必ずお参りしよう」と。

第10組・永覚寺門徒 栗尾 勲

仏事Q&A

◇ 手次寺から「ご引上をお勤めして下さい」と言われるのです。どのようにしたらよいのでしょうか?

▲ ご引上とは、家庭のお内仏でお勤めする報恩講のことです。一年に一度、必ずお勤めしなければなりません。仏事は、一番大切と思われがちですが、ご引上は、もっと大切な仏事です。

◇ 引上の仕度

はじめに、お内仏の清掃をして仏具のお磨きをし、その後、平常とは違う特別な仕度をします。

○ 打敷・水引

上卓に打敷をお掛けし、前卓には打敷と水引もお掛けします。

○ 五具足

鶴亀・花瓶(共に一対)と火舎香炉で五具足といえます。

前卓には、鶴亀と花瓶と土香炉を壮厳します。



小林光磨師に聴く

夏期真宗講座 第12組教化委員会

去る7月20日、赤羽別院において第12組教化委員会主催の、夏期真宗講座が開催されました。

12組の住職会では、かねてより「亡くなった人の願(本願)とはどんなことなのか?」また、葬儀の際に「御門徒より「亡くなったら我が世はどうなるのか?」などの質問に対する話し合いが重ねられてきました。

そこで1年以上の準備期間をおいて、滋賀県から真念寺住職小林光磨師を講師にお招きして「亡き人の願」を講題とする講座の開催となりました。

小林師が師事した吾我堂深先生のお言葉

「ご先祖さまはいつも自分の中におられる。ご先祖さまはいつも自分の心の深いところにおられる。だから自分がたすかればご先祖さまも助かるんです」

を示して、「ご先祖といつもはいつもご自分の中におられる。だからご先祖さまは、私たちの業は我が業である。我が宿業我が責任である。だから自分自身が助ければ、ご先祖も助かるのです。自分だけが助かるのではありません。自分が本願を信ずることによって助かるのです。無量無数のご先祖(無意識の世界)に生きていると説かれました。

そして「どうかお前助けてくれ」とみんな願っておられるのである。という言我先生のお言葉を紹介され「亡き人の願(本願)とは何なのか?」とても解りやすいお話がいただけました。

堂内は、二〇〇名を超す大勢の方が熱心に聴聞される盛会でした。(佐々木記)

中村久子パネル写真展開催



三重苦のヘレンケラー女史が「私より不幸にして偉大な人」と称えた中村久子女史のパネル展が8月24・25の両日赤羽別院で開催された。

女史は、凍傷が原因の特発性脱疽により、3才で両手両足を失う不幸に見舞われ、20才で口を使った裁縫や習字を見せ物とする旅芸人となったが、42才で「数算抄」にふれ、この縁で念仏者として求道生活に励み、執筆・講演活動により身障者をはじめ全国の人々に大きな光と力を与えた。会場を訪れた人々は、展示パネルの一つ一つに深い感銘を受けたようであった。(石川記)

赤羽地域教化センター

ホームページ作成中です。

http://www.katch.ne.jp/~akabane_betuin

貴寺院の寺報を掲載します。

発行されている寺院は赤羽別院までお知らせ下さい。

編集室

広報部では、赤羽別院崇敬区において、それぞれのご住職・ご門徒さんが共に創意工夫をして活動されている様子を、ホームページにアップしてまいります。各種の情報をお寄せ下さいますようお願いいたします。

また、これまでに皆さま方から賜った、ご懇志やご支援に対し篤くお礼申し上げます。

次号は、元日に新年号を発行する予定です。乞うご期待!

化粧品・生活雑貨

化粧品専門店の「温かさ」と「親しみやすさ」、バラエティコスメ・生活雑貨の「楽しさ」と「新しさ」を提案するお店づくりを目指します。

パルファン・シャオ店 〒445-0891 西尾市下町御城下23-1 シャオ1F TEL/FAX 0563-57-8132
くわこや・シャオ店 〒445-0891 西尾市下町御城下23-1 シャオ1F TEL/FAX 0563-57-8104

心つながる やすらぎのネットワーク

永田竹佛壇店

URL <http://www.nagataya.co.jp>
E-mail info@nagataya.co.jp